

異学年交流を取り込んだ総合学習の実践報告・美術編

ー 2009年度技芸科教科プロジェクト研究ー

筑波大学附属駒場中・高等学校 技芸科

土井 宏之・市川 道和

小宮 一浩・植村 徹

異学年交流を取り込んだ総合学習の実践報告・美術編

ー 2009年度技芸科教科プロジェクト研究ー

筑波大学附属駒場中・高等学校 技芸科

土井 宏之・市川 道和

小宮 一浩・植村 徹

要約

本校のSSH研究に「少人数制の授業に効果的なカリキュラムの作成、異学年交流を円滑に導入するための授業方法等の研究を継続し、実践する。生徒の研究発表会を実施・公開し、生徒の発表能力の涵養に努める。」とあり、美術科では、少人数選択型総合学習の高校2年ゼミナール美術講座と、同じく少人数選択型総合学習の中学3年テーマ学習（国語・美術）講座を合科型授業で実践し、授業方法等の研究を行う。このことは、その教科性から美術科が主体となって行うが、本校教育研究会での発表などにあたり、技術・芸術科全体の支援を受けて進めてゆく。美術科に限らない様々な要素・解決方法を教科プロジェクトとして集積し、ひとつの教科経営的ノウハウとして明らかにしたい。

キーワード：総合学習 美術 異学年交流 発表能力 芸術支援

1 はじめに

本年度、美術科においては、少人数選択型総合学習の高校2年ゼミナール美術講座と、同じく少人数選択型総合学習の中学3年テーマ学習（国語・美術）講座を合科型授業で行い、少人数制の授業に効果的なカリキュラムの作成、異学年交流を円滑に導入するための授業方法等の研究を継続し、実践する。本稿では、11月に行われた本校教育研究会における生徒の研究発表、及び公開授業に関する研究協議における成果を中心に報告する。

2 「美術科・高2ゼミナール」のめざすもの

「高2ゼミナール」は、生徒の希望選択による、少人数の総合学習であり、本来の「美術」の授業とは異なる。ゼミ全体を通じ「バーチャル美術館を創る」という制作活動を課題として行いながら、そのねらいは、「芸術（美術）を学問的に探求するための端緒をつかむこと、また、美術作品そのものや美術を取り巻く様々な事象を見、聞き、調べたうえで、社会との関わりにおいて考える力を身につけることを目指す。ゼミで

は、様々な切り口で講義、演習、見学等を行う。」こととし、ゼミ各回においては、制作のための基礎知識、考え方を学ぶ内容を展開した。

高等学校の「美術」は、当然のことであるが、美術の専門家を育てることを目標としているわけではない。もちろん結果として、高校での美術の授業の影響を受けてその方面へ進む生徒がでてくことは、教師にとってうれしいことではあるが、そのようなケースは、決して多くはないであろう。本校では、皆無に近いのが実状である。中等教育としての「美術」にとって、このことは指導要領の目標に照らしても、特段に憂慮すべきことではないかもしれない。しかし、生徒の将来進む方向の選択肢を広げる努力は積極的に行っても良いのではないだろうか。生徒にとって、「美術」と結びついた将来の道というと、画家、彫刻家、デザイナー等、制作する立場はすぐに想定できるが、美術作品や造形活動に対し、鑑賞者の立場から関わる立場もあるのだ、ということを知らせることも重要である。また、生徒が実際に研究者やアートジャーナリストなどの道に進まなかったとしても、美術作品そのものや美術を取り巻く環境に対し、考え、判断する力を身につけ、何らかの形で社会的な側面から美術と関わる姿勢

を育むことができればよいと考えている。現在の社会のシステムの中では、職業としての社会に対する関わり方は、現実には大学を選択する時点で大きな方向性が定まってしまうことが多い。しかし、芸術とは直接関わりのない方向、たとえば文科系の学部に進み、卒業後に企業人となったときのメセナ活動への姿勢、行政の立場に身を置くことになったときの文化行政の考え方等々、中等教育段階における「芸術」の影響力は、高等教育におけるそれよりも得てして大きい場合がある。その意味でも、少なくとも、単に消費者の立場でしか美術と関わることができない人間に育てたくはないと思う。

3 授業実践報告

3.1「美術科・高2ゼミナール」年間学習計画

●第1回 6/13 3,4時間 「講義」

テーマ1「西洋美術史・キリスト教と美術・西洋美術に見る人体表現」 ギリシャ・ローマ時代から印象派に至るまでの西洋美術の流れを主に人体表現について、キリスト教との関わりをふまえて考察する。キリスト教の理念と科学の発達との関係についても考える。

(紹介事例、資料) ギリシャ彫刻、ゴシック柱像彫刻、ダビデ像、マニエリスム絵画、バロック絵画他。
テーマ2「次回見学会のための事前学習」 全国の公立美術館の現状について、特にバブル期の箱モノ行政による美術館を含めた文化施設の乱立と、行財政改革による文化関係予算の縮小、民間移行も含めた経済的自立への模索などの現状についての概説。

(紹介事例、資料) 京都国立博物館「スター・ウォーズ展」・東京都現代美術館「ハウルの動く城展」・金沢21世紀美術館の取り組みなど

●第2回 6/27 午前10時～12時30分「鑑賞見学・レクチャー」東京都現代美術館

テーマ「現代美術の現況・公立美術館のこれから・その使命と今後のあり方」

前半「常設展鑑賞」 学芸員による解説を受けながら常設展示の現代美術の作品鑑賞。

後半「学芸員によるレクチャー及び質疑応答」

東京都現代美術館の設立の趣旨と経緯、作品収集と展示の考え方、行政(東京都)との関係、入場料を含めた経済的側面、公立館としての市民向けサービスなど、館の努力の現状と課題、行政に対する注文も。生徒との質疑応答の後、再度館内見学。

●第3回 9/12 1,2時間目「講義」

テーマ「日本・東洋美術史・仏教と仏像・密教の世界観」 世界の主たる宗教の基本理念をふまえた後、仏教の出現、ブッダ(シッダルタ)の誕生から仏像造像までの流れを概説、日本に伝播した後の密教の世界観を詳説する。その世界観の表出としての仏像彫刻について理解させ、美術品としてだけでなく、信仰の対象としての造形物の見方を実感させる。

(紹介事例、資料) 西村公朝氏「仏の世界観」、東大寺大仏の蓮台、曼陀羅図、仏像彫刻数点

[第1回、第2回、第3回の講座内容や自身の経験などをもとに「アトライター大賞」の応募原稿を書く]

●第4回 10/17 3,4時間目「講義・演習」

テーマ「美術解剖学入門」

「講義」 美術解剖学とはどのような学問なのか、またその発達の経緯を概説。美術史上比較的有名な作品を例に、「まことしやかなうそ」を解説。

「演習」 解析をする題材として「キリストの磔刑(イーゼンハイム祭壇画・アントニウス会修道院)」部分、グリュネヴァルト作 1511～1515 頃制作、ウンターリンデン美術館(コルマル、フランス)を設定する。画家及び作品について、時代背景も含めて概説する。

ワークシートとカラープリントを元にまず個人で解析してみる。個人の解析を発表しあい、まとめる。

●第5回(A) 11/17 3,4時間目「制作・発表」

前半 バーチャル美術館作成作業

後半の中間発表に備えて制作を進める。

後半 作品中間発表 「バーチャル美術館を創る」全8回の内の5回目にあたる。制作状況の確認と生徒同士による相互評価のための中間発表を、6回目にあたる次回と合わせて2回行う。中学生にもわかりやすく興味を引く内容になるよう、通常の授業時には同じ場にはいない中学3年生に作品を鑑賞、評価してもらい、作品完成にむけ推敲、改善の一段階とすることを目的とする。

●第5回(B) 11/21 2時間目

教育研究会「バーチャル美術館を創る」中間発表2 詳細は後述・・・3.3 学習指導案

●第6回 1/09 2～4時間目「発表・面談」

前半 発表 最終作品を発表、鑑賞し、感想を述べ合う。

後半 面談 「卒業テーマ研究」に向けて、個人の研究テーマの立て方についての示唆の後、各個人と面談形式で指導を行う。

●第7回 1/23 午後1時～3時「外部講師による講演」

テーマ「日本・東洋美術史・信貴山縁起絵巻をジェンダー的視点から見る」

「講師」 恵泉女学園大学・稲本万里子先生
事前学習として 12 月中旬に本校の国語（古典）の教員により、事前学習をしておく。

3.2 年間通じての生徒の活動と反応

美術ゼミ選択者は本年度 11 名（昨年度は 6 名）と少人数で、かつ希望して選択してきた生徒達であるため、かなり掘り下げた内容の学習が可能である。また、授業時間の変更などにも柔軟に対応できるため、通常の授業では困難な校外での学習活動が行える。教室における座学では、生徒個人との細かいやりとりができ、個々人の興味関心の方向性なども把握することができる。校外の美術館などの見学においても、少人数のため、学芸員の方の話が間近で聞け、第 2 回の東京都現代美術館の見学では積極的に質問する生徒もいた。

3.3 学習指導案

1. 日時 11 月 21 日（土） 2 時間目
2. 授業者 土井宏之（美術科教諭）
3. 対象学級 高校 2 年ゼミナール美術選択者 11 名
中学 3 年テーマ学習「国語・美術」選択者 7 名
4. 題材名 「バーチャル美術館を創る」中間発表②
5. 指導目標
 - ・中学 3 年生にとっても、わかりやすくかつ興味関心を引く発表ができるようにする。
 - ・前回の第 1 回中間発表会における指摘、アドバイスが反映された、作品、発表になっているようにする。
 - ・中学 3 年生が高校 2 年生に対して、自分なりの考えや感想を率直に伝えられるようにする。
6. 準備（指導者）プロジェクタ、パソコン、評価用紙（生徒）発表用作品データ
7. 指導計画

時間	学 習 活 動	指導上の留意点
導入 5 分	・本時の全体の流れ及び作品 発表、相互評価の 手順について確認する	
展開 40 分	・高校 2 年生が作品を発表し、他の高校 2 年生、 中学 3 年生が鑑賞する ・鑑賞した作品及び発表 について用紙に評価を記入する ・作品についての質疑応 答、評価、感想を述べ合う	・鑑賞と評価票への書き込みがスムーズに行われるようにする ・中学 3 年生が高校 2 年生に対して、自分なりの考えや感想を率直に伝えられるようにする。

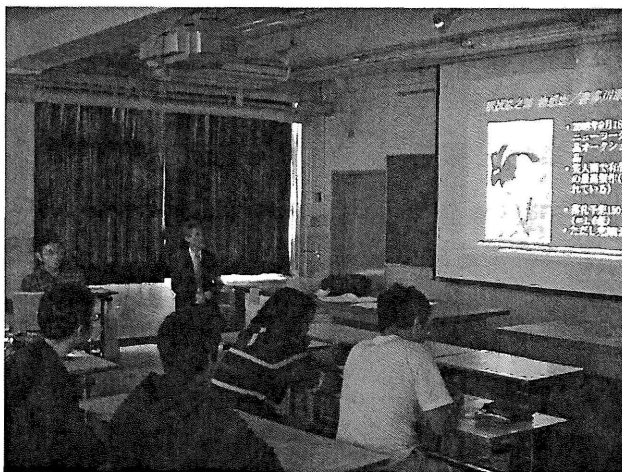
まとめ 5 分	・本時の内容を振り返る ・次回までの課題を確認する	・本時のねらいが理解できるようにする ・本時の発表をふまえて、作品を更に創り込めるようにする
------------	------------------------------	---

8. 評価

- ・中学 3 年生にとっても、わかりやすくかつ興味関心を引く発表ができたか。
- ・前回の第 1 回中間発表会における指摘、アドバイスが反映された、作品、発表に なっていたか。
- ・中学 3 年生が高校 2 年生に対して、自分なりの考えや感想を率直に伝えられたか。

3.4 合同授業における生徒の活動と反応

公開授業当日は、高校 2 年生 3 名が作品発表を行った。A 君のテーマ「浮世絵とジャポニズム」
プレゼンテーションツール・・・open office
内容・・・主に浮世絵と印象派の絵画を対比させながらその影響関係をわかりやすく解説した。画像と文章の割合が適当で、視覚的に見やすい構成となっていた。あたかも実際の美術展をめぐるかのように、はじめに企画の趣旨が提示され、最後にまた最初の画像に戻ることによって、入口と出口が想像されるように作られていた。中学 3 年生にとっても非常にわかりやすい発表であった。



S 君のテーマ「CONCREAT ART（具体美術）」
プレゼンテーションツール・・・power point
内容・・・視覚詩、タイポグラフィ、詩歌など様々な作品を取り上げながら、言葉、文字、視覚、聴覚イメージ等の相互作用、美術という範疇にとどまらない芸術について、発表者の感じ、考えたことを発表した。内容はやや難解であり、発表者独自の視点にとまどう部分もあったが、普段目にしないジャンルの芸術に触

れたこともあり、中学3年生も、仲間の高校2年生も興味関心を引かれていた。



K君のテーマ「アフリカ美術」

プレゼンテーションツール・・・open office

内容・・・アフリカ美術を西洋美術と対比し、エドワード・サイードの文明論に共感する発表者の視点で展開した。アフリカ美術を西洋美術と対等の位置に置き、その根元的な部分をわかりやすく紹介しようとする試みであった。難解な論理を自作の図などを使いながら、中学3年生にも理解できるように工夫されていた。

3名の発表に対し、そのたび毎に評価用紙の記入を行い、平行して質疑応答、感想を述べあった。特に中学3年生からは、自発的に感想が寄せられた。授業者がそれを受けて各人に対し、アドバイスをを行った。発表者は、当日の評価、感想を参考に最終作品完成にむけて制作を継続することになる。

4 成果と課題

4.1 研究協議会における討議より

授業者の発言：美術は、「表現」がキーワードになるが、美術の中でも「描く」「つくる」のみならず、表現のあり方はいろいろであるということを提示してあげるのは重要。今回のメインの主題は、異学年を同じ場におき相互評価を学習活動に結びつけるものである。今回授業での中学生からの評価には制作者にもプラスになるものが多かった。一方、前回授業では中学生（アートに近い制作をしている）に対して、高校生側がさまざまな評価をしていた。相互評価を異学年集団を同じ場においてやる意味があるのではないかと。ただ、なかなか一年を通じて実施することは難しい。本校の仕掛けとしては、11月17日に全校的にゼミ・テーマ合同開講を実施し、SSHの研究の一環として「教えあい学び合い」をおこなった。高校生は今日の成果を

元によりよい作業ができるのではないかと。中高合同の場合は2回のみだったが、長期的に積み重ねていくことが必要だ。本校としての取り組みは2年目で発展途上である。ご指摘の通り中高が一緒の場にいるだけでも意識する。前回は中3は内容がわからずに哑然としていた。今回、高2は中3にもわかってもらいたくて内容を改めてきた。積み重ねることで学習効果があがってくると感じた。

参加者の発言①特にS君の発表前の意気込みや発表後に高揚し満足を感じているのが端から見ていておもしろかった。A君のジャポニズムは模範解答的でそつがない。S君は視点がおもしろかった。ただ、芸術の分類がまだ系統立っていなかった。K君のアフリカ美術発表での、「西洋美術的視点が一步上から見下ろしているのでは」という問いかけが面白かった。村上隆が「日本人は浮世絵をある意味では評価していないのではないかと」と言及していたが、西洋に評価されたことを評価する、つまり自分たちも西洋的な立場に立って評価しているのではないかと、と私自身も考えているので、これまでとは反対の評価に興味を持った。このような形で彼らが表現をしていることにおもしろみを感じた。今回の授業では中学生はある種「そこにただけ」という感じもしたが、前回があったから、高校生も中学生の視点に気づき成長したのではないかと。

②総合学習の時間の使い方が参考になった。本校ではクラスを二つに分けて調べ学習を積み重ねて発表を行っている。教師側のプレゼンを実際に示しながら、生徒の発表につなげていくというものを行っている。今回のようなプレゼンは初めて見たので参考になった。たとえば、縦割りの集団をつくって同じテーマで指導をするあり方もあるのかなと思った。中間発表というブラッシュアップの仕方も参考になった。

③私自身の体験で、中学生の時に高校生に教わったことから触発を受けた。今回はすばらしい機会で、絶対的に大きい影響を与えると思う。他者からの客観的な評価を元に作品を改善できるこのやり方は学習の深化がはかれる取り組みだと思う。作品をつくって見てもらうということを意識しないと学習はまとまっていけない。絶対的に必要だと思う。全体的に評価をまとめたり講評したりする機会があると広がりが出るのではないかと。

④生徒の視点の鋭さには驚かされる。自分の考え主張を盛り込みながら、見る人に分かるように伝える能力がすばらしいと思った。中学生がこの場にいたことで発表者が聞き手を意識するという話があったが、3

人目の発表者・K君が「ため口」だった。1人目2人目の発表は大人びた丁寧な口調で早口で聴きながら理解するのがむずかしかった。K君はまるで弟に教えるような和やかさがあられほえましく見られた。芸術を社会とのつながりで見ることができたという点で総合的な学習としての成果は大きいのではないか。

⑤SSHを地方の公立高校に持って行った場合、美術との接点が見いだせないし、声もかからない。にもかかわらず筑駒では美術で取り組んでいる。将来的に卒業生は社会のリーダーとして活躍するだろうが、このテーマが生きるのは時間がかかることだろうなと思っている。

授業者の発言：時間がかかることを承知で、美術というテーマで取り組んでいる。社会に出た際に、中等教育の段階で自ら学んで感じ取ったことが生きてくると思う。長いスパンだがそこを狙って芽を育てられないかと狙っている。また、本校のSSHは特に理系に特化しているのではない。美術で言えば、異学年交流やプレゼンテーション能力の育成などでアクセスできると考え、取り組んでいる。

4.2 今後の展望

上記の協議会における討議にもあるように、今回実践した、異学年集団による合同授業は、総合的な学習の時間を活用することによって実現できたものであり、そのプラス、マイナス両面を検証しなければならない。評価されうる面としては、美術をはじめとする芸術、実技系の教科が、総合的な学習の時間を積極的に担い、活用することによって、本来少ない教科の授業時間を補うのみならず、教科の枠を越えた展開をすることにより、大きな可能性が期待できる。実験的な実践の他教科への発信、提案ということも十分可能であると考ええる。

一方、今後の課題、現状における限界としては、総合的な学習の時間を活用して行ったこのような実践を、正規の多人数の授業においてどのように生かし、あるいは発展させてゆくかということである。正規の授業は、対象人数が多く小回りが利かない。また、学習指導要領に基づきながら、年間通じて、一定以上の割合で手作業中心の表現の題材も確保されるべきである。じっくり時間をかけて上記のような実践を行うには、実際には余裕がないというのが現実である。うまくバランスを取りながら、今回の実践でえたノウハウを正規の授業へ還元してゆくことが課題となる。